

gitai

擬態

瀬

koseko design & press portfolio
tomoyuki koseko

website <https://gitai.press.com>
instagram@kosekolabo

<https://www.behance.net/kosekolabo>
<https://opensea.io/collection/gitai-graphics>

小瀬古文庫

koseko design & press

小瀬古文庫とは

近代の産業革命より 150 年以上に渡り、続けられているデザイン。「美しい物をつくる」「商業性の高い物をつくる」「社会問題を解決する」など、デザインには様々な社会的役割がありますが、私はデザインを通して「新たな見えかた」をつくっています。

Tomoyuki Koseko – 小瀬古智之

1985 年埼玉県生まれ・神奈川県在住。擬態デザイナーとしてアートブックを軸に作品の企画・制作・デザインを行う。小瀬古文庫の「小瀬古」は三重県に由来する苗字です。武蔵野美術大学大学院・デザイン専攻修了。研究テーマは「夕景のデザインにおける夕景の表現の研究」。

小瀬古文庫の活動

1 / ARTWORK – 表現の実験

受け手が「ハッとする」表現をデザインの視点から研究・制作しています。生物の擬態が私達の眼に驚きをもたらすように、デザインに潜む擬態を発掘し、私たちの見慣れた日常にフレッシュな視点をインストールすることを目指しています。

2 / ARTBOOK – アートブックの発行

「デザインの力で『もの』に潜む擬態を可視化する」をテーマに不定期に発行する実験的なアートブックマガジン「gitai」を中心にアートブックの企画・製作を行っています。表現の研究や書籍デザインの経験から、高品質かつ新たな視点を読み手にもたらし本づくりを心がけています。国内外の書店・アートブックフェアを通して展示・販売しています。

3 / DESIGN – デザインの制作

アートブック・ロゴ・書籍などのデザインを得意としています。美しさと読みやすさ、そして遊び心を大切にしています。

クリエイションを通して、創造性の流通の一角を担うとともに、人々がより自由に表現ができる環境づくりを使命としています。表現の抑圧から人々を守るため、独立出版運動の形態を取り、直接の取引や販売を心がけ、顔の見える出版活動を目指しています。また、企画・デザイン・製作まで一貫して行います。

- ・擬態をはじめとするヴィジュアルカルチャーの研究と実践
- ・高品質な出版物・作品の発表
- ・異文化の独立出版との積極的な交流



瀬

koseko design & press portfolio
tomoyuki koseko

website <https://gitaipress.com>
instagram@kosekolabo

<https://www.behance.net/kosekolabo>
<https://opensea.io/collection/gitai-graphics>

2020-	「ハムの惑星」が UNKNOWN ASIA 2020 online にて、審査員賞 ERIC ZHU 賞および、レビュアー賞を受賞	個展「ハムの天文学」ART Lab OMM/ PLANT (大阪)・BLANK (東京)	UNKNOWN ASIA 2020 online (大阪) Virtual Art Book Fair UNFOLD Shanghai Art Bookfair (上海)
2019		二 人 展「Fictional Landscape」Garden City Bookstore Gallery (台湾)	UNKNOWN ASIA 2019 (大阪) Break Off Art Book Fair (台中) Tokyo Art Book Fair Ginza Edition (東京)
2018	「年輪する擬態地図」タモリ倶楽部で紹介	個展「物的擬態」forestbooks gallery (中国)	Unlimited Edition10 (ソウル) Taipei Art Book Fair (台北) UNFOLD Shanghai Art Bookfair (上海)
2017			Tokyo Art Book Fair (東京)
2016	「肉する擬態地図」が Hyperallergic に掲載 / 「肉する擬態地図」が Spoon&Tamago に掲載	グループ展「a or d ?」IID gallery (東京)	Unlimited Edition8 (ソウル) Tokyo Art Book Fair (東京) SICF17 (東京)
-2015	Exapieco Inc. に勤務 (2021 年 4 月まで) / 大学院修了制作「Sunset in Letters」が MCJDA 佳作受賞	静動 still motion, IID Gallery (東京)	

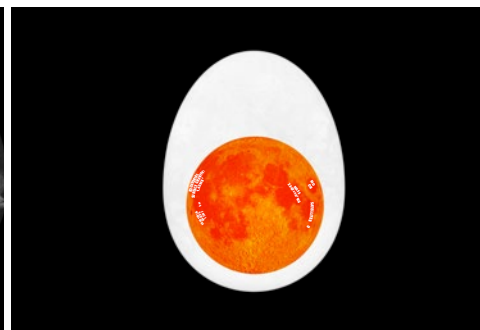
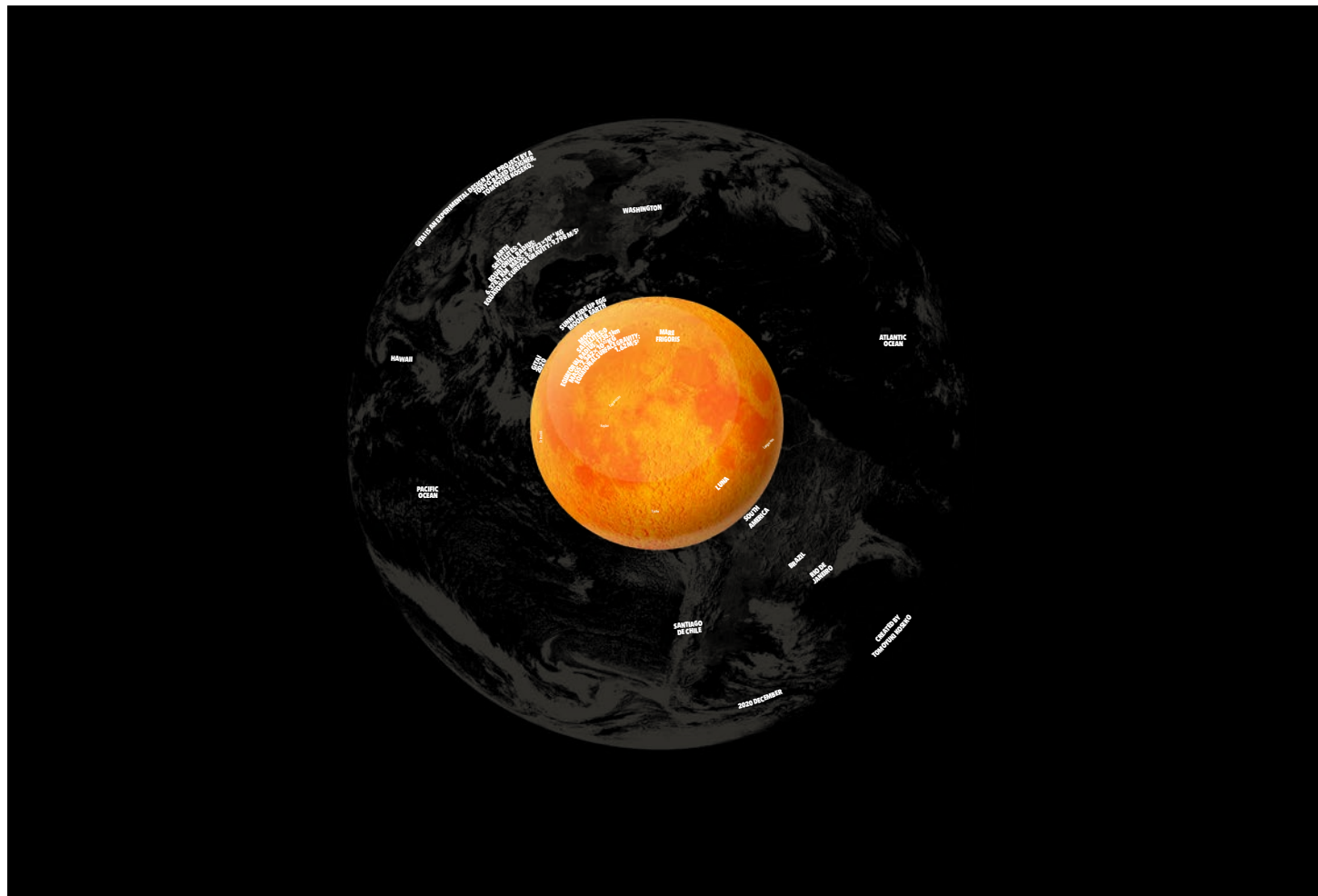
gitai project

月見の起源

おいしい惑星 (2021)

生卵のスーパーリアル리즘を天体の擬態で表現しました。寄り引きの表情の変化が特徴で、細部に白のタイポグラフィを忍ばせ、卵の艶に擬態させています。目玉焼やゆで卵、ハムエッグといった愛らしい卵のビジュアルが、天体と邂逅するその瞬間を彩ります。

本作で取り上げたテーマは「可食生命」である。食べ物を擬態対象として扱うと、その「驚き」が際立つように感じる。理由は定かではないが、それが生命であるという所は、元々の擬態が生物学の文脈であることを関係がありそうだ。シュレーディンガーが「人間がネグ（負の）エントロピーを食べて生きていく」と指摘したのも一考に値する。月見という言葉があるように、私たちが惑星にシズルを感じることは、生命システムに依って認識やメタファーが生まれているのかもしれない。



惑星の味覚

ハムの惑星（2020）

一見すると、色鮮やかでフォトリアスティックなハム。しかし、よく見るとその正体はピンク色の天体です。惑星をピンクに塗り替え、ラベル・トレーを描き加えることで、ハムに見立てています。

このアートワークの制作上のテーマは「イメージの距離（ギャップ）」だった。日常的なハムと壮大な宇宙を構成する天体を組み合わせることで、イメージの奥行きを与えようと考えた。プロトタイプの段階では「肉する擬態地図」と同様にフラットなイラストレーションだったが、制作を重ねるにつれ、写実的にした方がハムと天体のギャップが際立つことを発見し、このような写実的のヴィジュアルになった。



地図の精肉店

肉する擬態地図 (2016)

地図を赤く着色し、ラベルやトレーを描き加えると、お肉に見えてくる。そんな発想をイラストレーションにしました。ここに描かれた赤身や脂身は、実在する湖や河の形でできおり、地形の中に赤身の旨味や脂身のコクを感じることができます。

擬態シリーズの記念すべき第一作。フィンランドの地図の有機的図形に着想を得て、ラベルとトレーを書き加え、サーロインに見立ててみた。すると、その湖沼が美しいサシとなって現れ、そこに味覚のイメージが広がるヴィジュアルが生まれた。その後、台湾やキューバといった肉に見立てられそうな形を見つけ出し、フィレ肉や豚バラ肉といったバリエーションを展開した。発表の場を探す中で、に困っていたところ、東京アートブックフェアの存在を知り、「出版」という発表形態をとる小瀬古文庫の活動の始まりとなった。

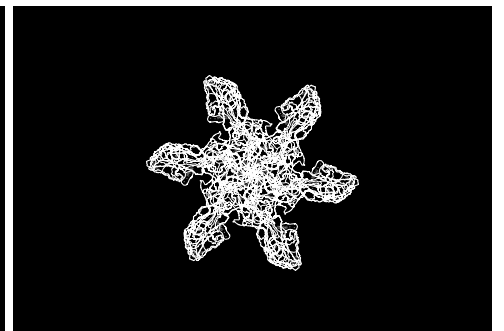
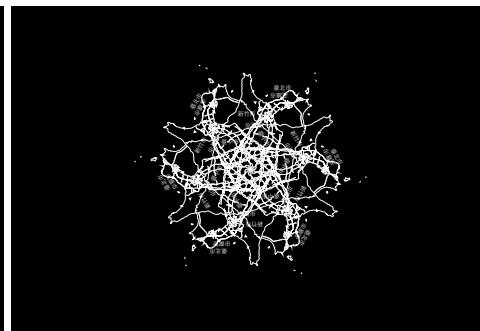
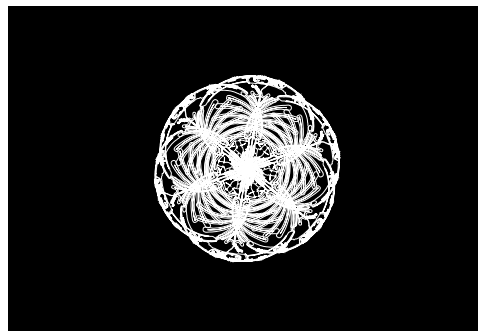
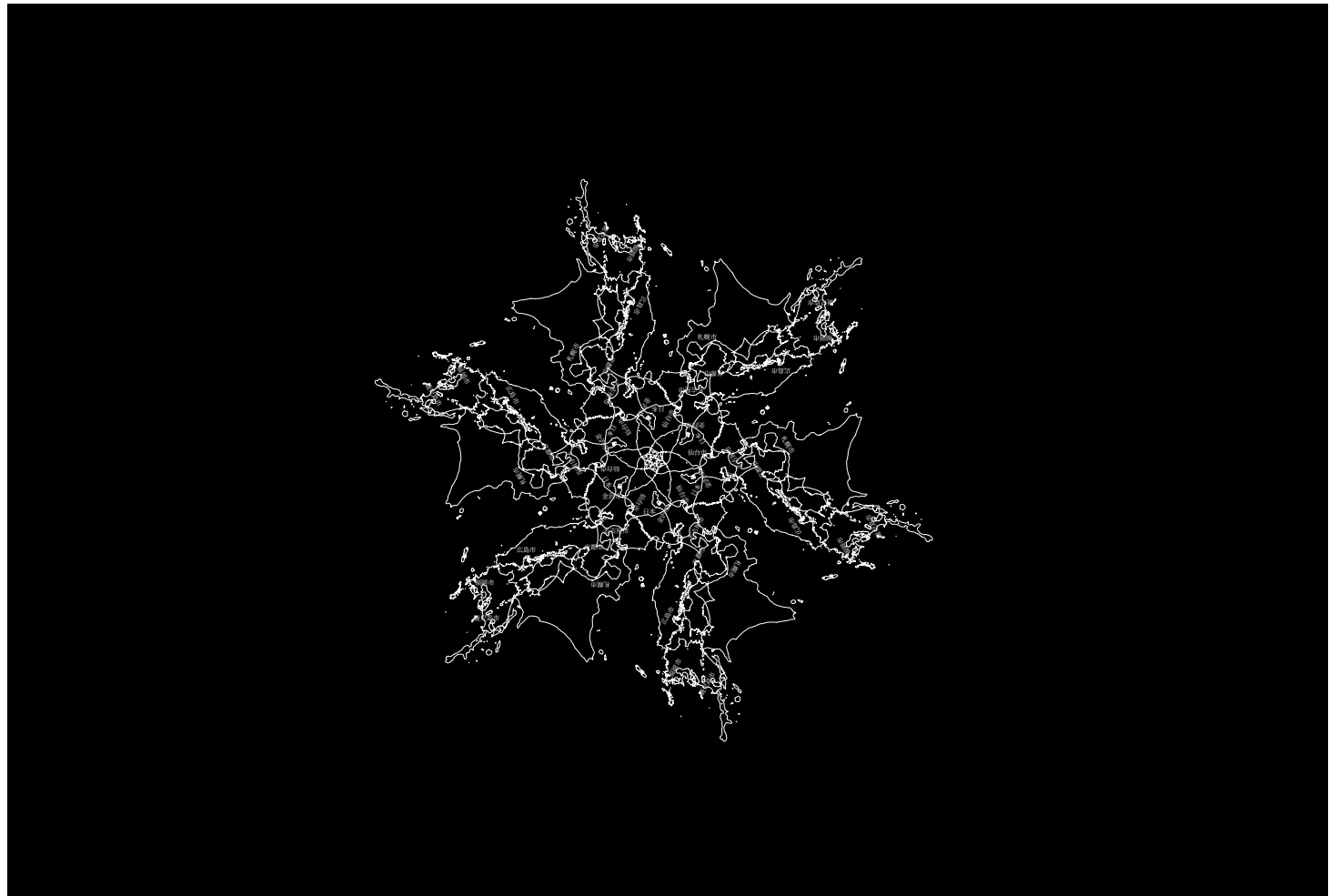


地図の結晶学

雪華する擬態地図（2019）

存在しない、架空の雪の結晶を、地図を重ね合わせて作るプロジェクト。眺めていると、十人十色の地形が生み出す、美しい雪の世界が広がります。地図という人類の測量の成果に新しい雪の華を見出す。その実在しない偶然の美しさは私達の眼に新たな問いかけをもたらすかもしれません。

「法則性」をキーワードに取り組んだ本作。肉や年輪が精緻な相似を志向したのに対し、本作では六角形状に地図を配置することで生まれる結晶の多様な美しさを主題にした。それらを採集し、標本のようにまとめることで各地の地形が生み出す結晶を一望の元にした。

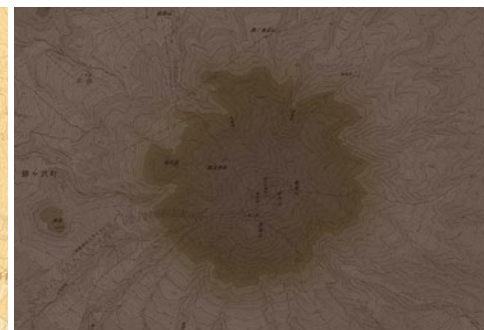
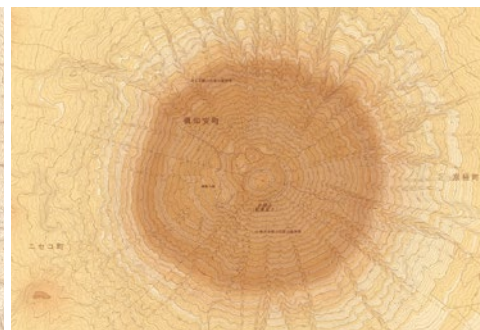
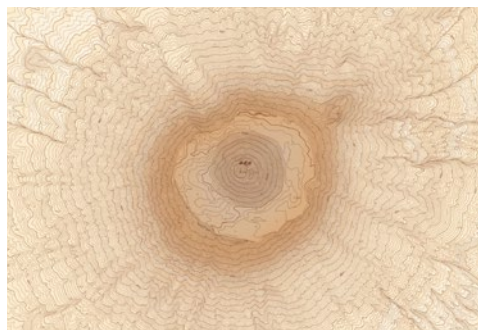
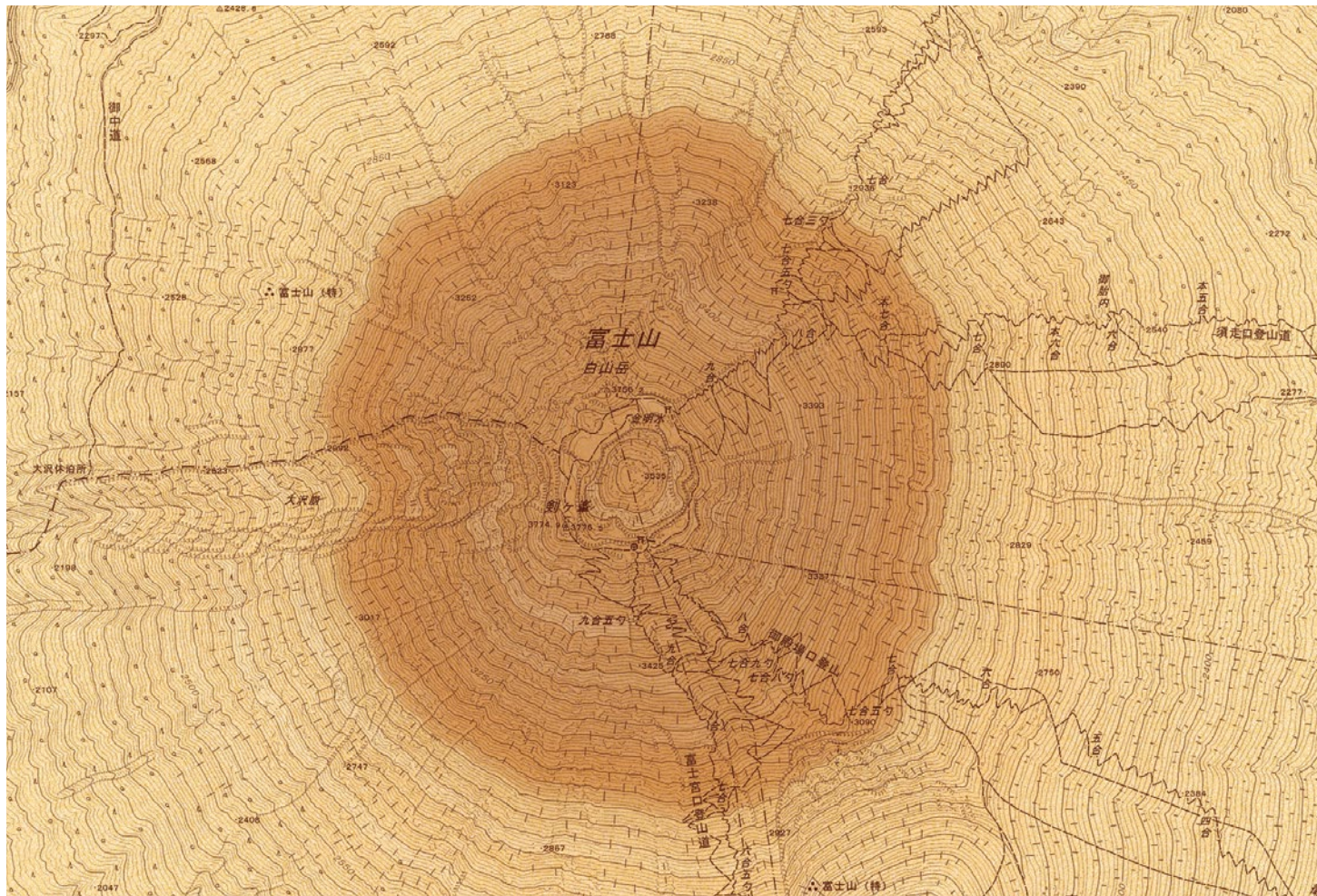


等高線の年輪

年輪する擬態地図（2017）

地形図の等高線を年輪に見立てて、木目の表情を再現しました。緻密に描かれた木々の細部を見ると、山々の地形図であることがわかります。この地形図から浮かび上がる年輪たちの精密な表情こそ、本作の特徴です。

前作「肉する擬態地図」よりもリアリティを求めて制作した本作。等高線や地図記号や道路などの地図の要素を年輪のノイズに変換し、同じ模様のない年輪らしさを最大限引き出すようにした。実はこの地形図のほとんどは、火山である。普通の山ではマダラ模様が強すぎて、一般的の木目に見立てることができないのだ。

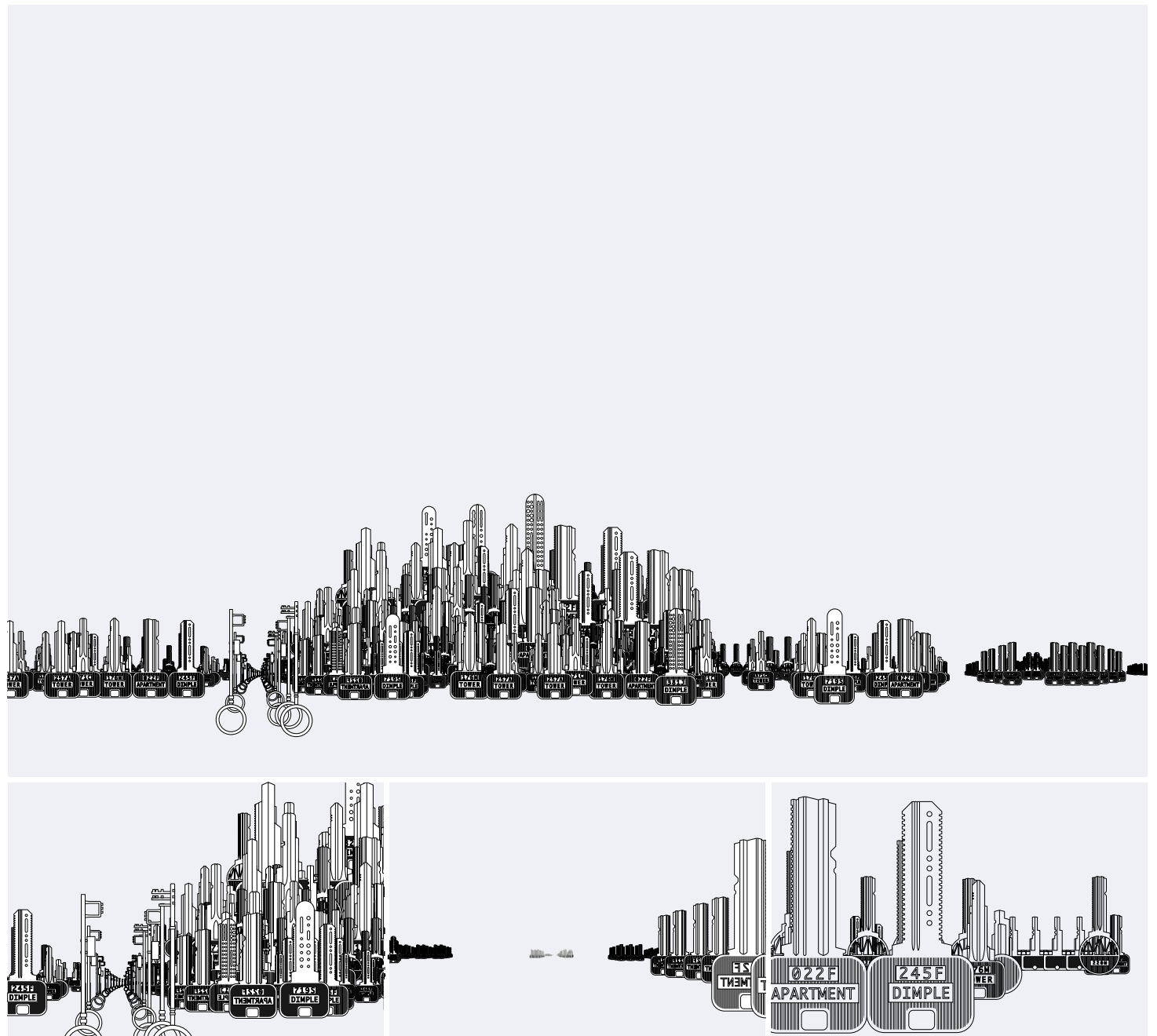


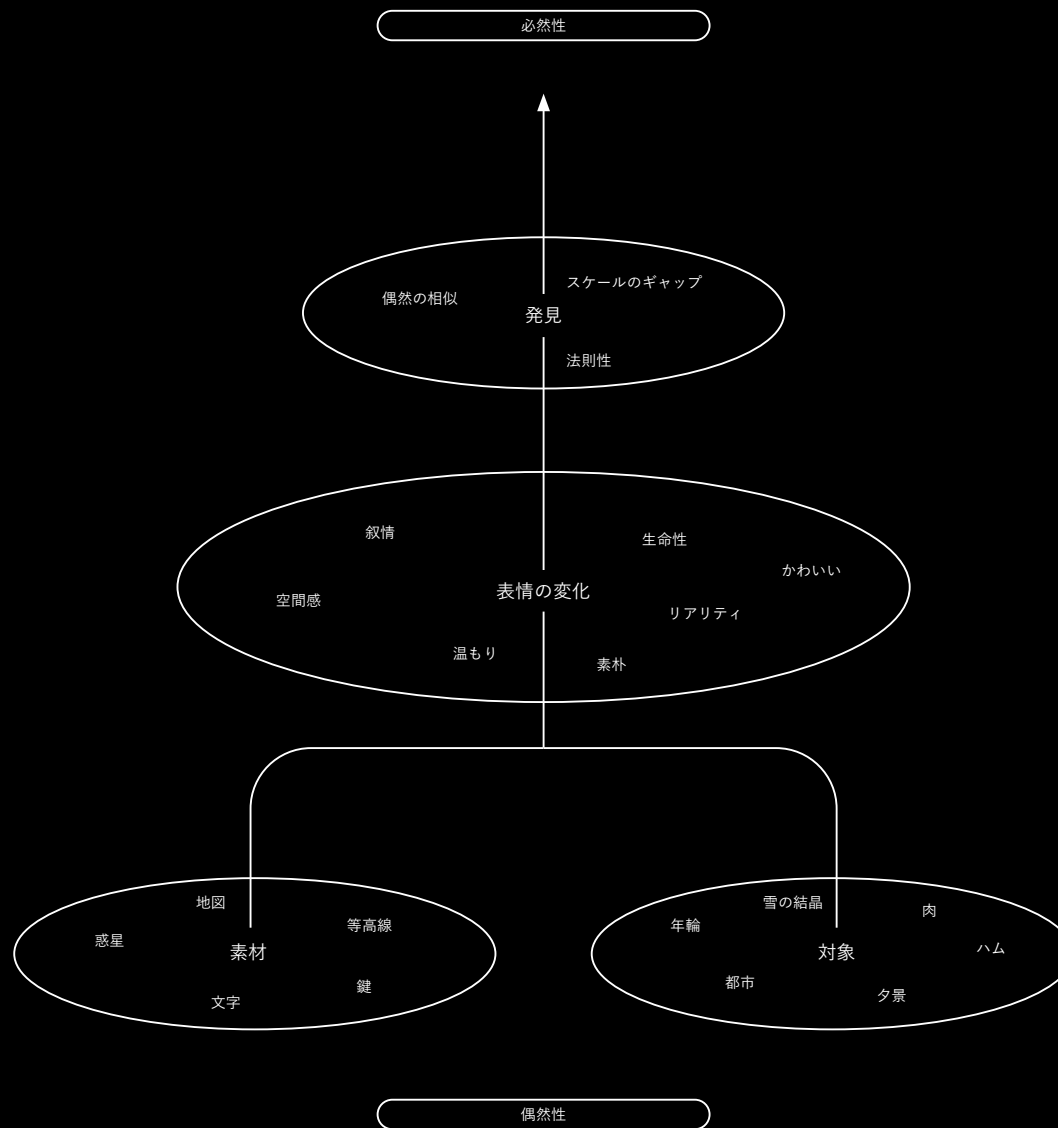
鍵に見出す都市性

鍵のメトロポリス (2018)

鍵が集積することで、鍵の大都市を形成しています。人々のセキュリティのために作られたプロダクトと、多くの人が住まうために建てられた高層建築物。これらのかたちは、都市に住まう私たちの精神性を象徴しているのかもしれない。

電柱、ビル、タワー。都市の構造物は、重力に対して安定させるために先細りしながら高みへとその形を描いてきた。鍵も鍵穴に挿すために先細く形を描いてきた。都市の持つ「先」のある形から、その共通する都市性をヴィジュアル化した。





偶然から必然へ
擬態をもたらす認識の変化

「擬態するデザイン」は、擬態という自然界のデザインの驚異を、日常風景に見い出して視覚化する、ヴィジュアルコミュニケーションの実験だ。擬態という驚くべき容姿の一致は生物界の専売特許のようだが、僕らの身の回りの「もの」にも身を潜めている。昆虫が自身の形と色を自然に似せるように、静物も擬態を通じてデザインに驚きをもたらすことが出来るのではと考えた。

生物の擬態の、眼に驚きをもたらすメカニズムが面白い。彼らのデザインには私たちが驚く、模倣のクリエイティビティが多々存在する。それに倣って、「擬態」を私たちの日常からデザインする表現研究を開始した。

実際に製作を重ねると、ハムと宇宙、地図と年輪、鍵と都市といった、私たちの固定観念とは全く異なる生態の関係性を目撃する。そこで発見した関係性や驚きをアートブックとして発行し、共有している。人工物のフィールドに潜む、未知の擬態との出会いに可能性を感じて頂ければ幸いだ。

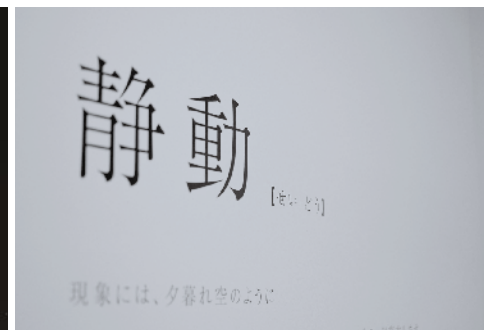
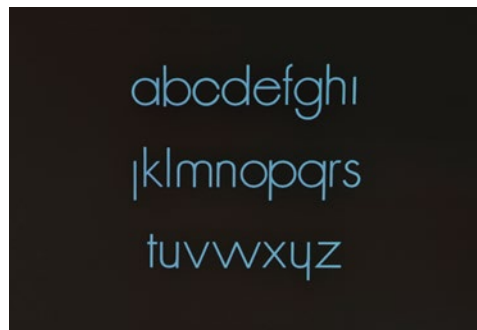
sunset project

「いつの間に」のデザイン

静動（2015）

オンスクリーングラフィックの実験として、架空の書体・ポスターを製作しました。見掛け上は普通のグラフィックですが、ふと目を離した際にaがdに文字の形が変化したり、ポスターの図柄内の時計が実は変化していたり。変化を魅せるモーショングラフィックではなく、変化を隠すことで生まれるヴィジュアルコミュニケーションを視覚化しました。

大学院から続けている夕暮れの研究の3作品目。夕暮れ空を見ている時、一度目を離し再び空に目をやると、いつの間にかが暗く変化していることがある。この「いつの間に」という感覚を発露させるような、繊細な変化の性質を「静動」と名付けた。現在の擬態シリーズとはまた異なる、新たな表現を見つけ出す取り組みだ。



瀬

koseko design & press portfolio
tomoyuki koseko

website <https://gitaiypress.com>
instagram@kosekolabo

<https://www.behance.net/kosekolabo>
<https://opensea.io/collection/gitai-graphics>

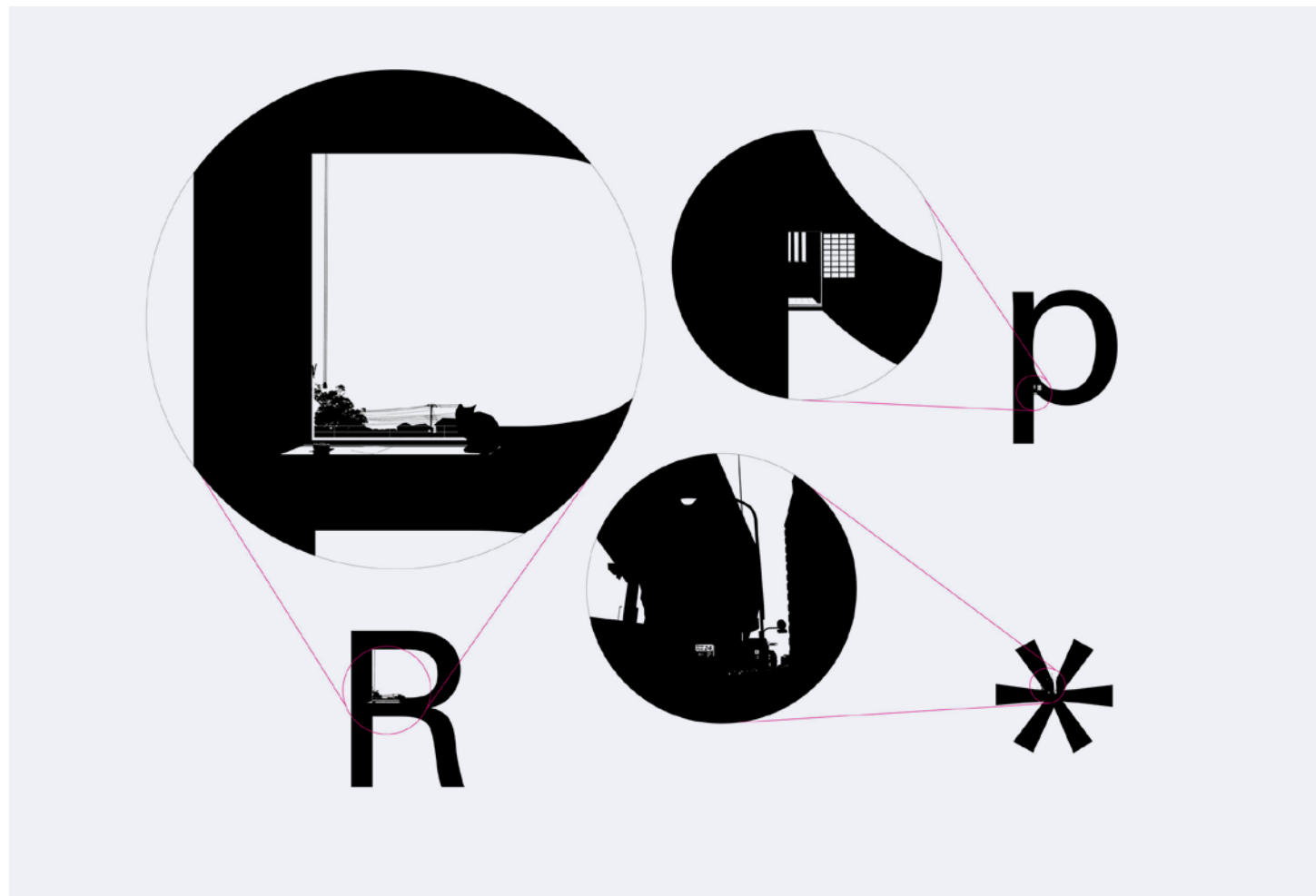
寄り引きの表情の変化

Sunset in Letters (2012)

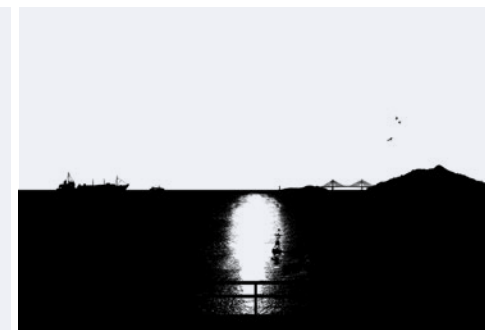
一見すると普通の書体ですが、拡大するとその表情が夕景のシルエットに変化します。この寄り引きの表情の変化こそが、本書体の特徴です。書体を拡大するにつれ、夕景の叙情・奥行き空間や光が、文字や余白の中に立ち上がります。

文字とシルエットに共通する「黒」に着目し、書体デザインに夕景のシルエットを組み込む実験。書体デザインに夕景のシルエットを組み込む試作を重ねるうちに細部に重ねると、寄り引きの表情が生まれることがわかってきた。文字の形とシルエットの組み合わせを検討しながら、書体を完成させた。

本作品が大学院での修了製作となり卒業制作のアワード Mitsubishi Chemical Junior Design Award 2012 で佳作を受賞した。頭ごなしに考えるアイデアの中には表現は存在せず、それを手で乗り越えた先にあることを教えてくれたプロジェクトだ。



ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwxyz
!?,#+ -*1234567890



「はだいろ」の再定義

Human Illumination (2010)

暗闇の中で局所的に皮膚を LED で照らすと、そこには赤く燃える夕焼け空のような色彩が広がります。これをヒューマンイルミネーションと名付け、身体のような場所に光を当て、その色彩を採集しました。

身体から夕焼け色を生成することをテーマに、多彩な写真を撮影した。技術もまだ拙いが、作ることによって初めて見える景色とその感動を味わってくれた作品だ。後々の GITAI につながる初期のプロジェクトだ。

